

埼玉県における後期旧石器時代前半期初頭の様相

西井 幸雄

要旨 埼玉県は後期旧石器時代前半期初頭の調査事例は少ない。その中で、さいたま市清河寺前原遺跡と深谷市北坂遺跡から、黒曜石製の精製台形様石器を伴う良好な石器群が検出された。筆者は、両遺跡の発掘調査及び整理作業に携わった。これを機会に、埼玉県の資料を中心に後期旧石器時代前半期初頭の石器群を検討した。その結果、立川ローム最下底部から第2暗色帯中の石器群を3時期に区分することができ、不定形剥片、縦長剥片a、縦長剥片b、精製台形様石器の4系統の石器群がある事を確認した。

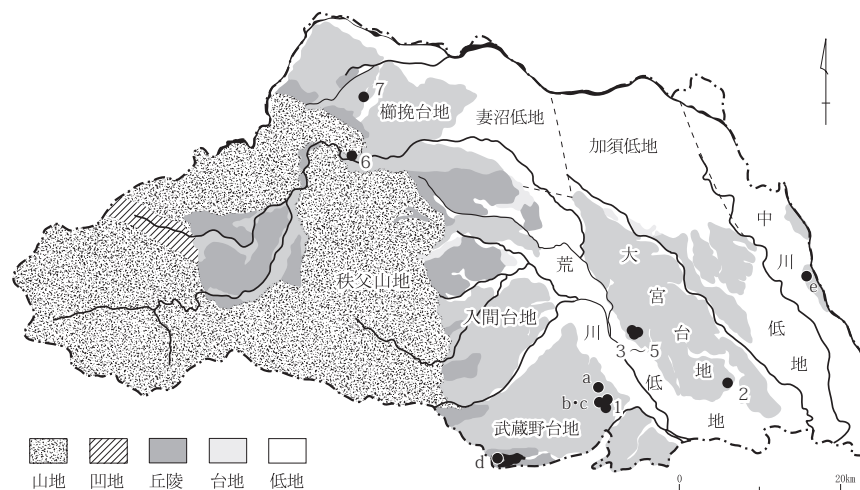
はじめに

埼玉県は後期旧石器時代前半期初頭の調査事例は少ない。その中で、筆者は2002年にさいたま市の清河寺前原遺跡の発掘調査・整理に携わる機会を得た。その際、黒曜石を主体としたナイフ形石器・精製台形様石器が多数出土しているのを見て、この様な遺跡は南関東でみたことがなく、長野県で発掘調査をしているような錯覚を感じた。その後、2016年に深谷市の北坂遺跡の発掘調査で黒曜石の精製台形様石器が出土したが、清

河寺前原遺跡出土の石器群とは、違いが幾つかあった。報告書で両石器群の違いを時期差として考えた。本論は、再度清河寺前原遺跡と北坂遺跡を中心に、埼玉県の後期旧石器時代前半期初頭の石器群を討する。

1. 遺跡分布

埼玉県は関東地域の中央部に位置し、西側は山地、東側は平野に大別できる。平野部の地形を確認すると、西側は関東山地から伸びる丘陵・台地



- 1: 藤久保東遺跡 2: 明花向遺跡 3: 清河寺前原遺跡
4: 大木戸遺跡(西大宮バイパスNo.6) 5: 西大宮バイパスNo.5 遺跡
6: 末野遺跡 7: 北坂遺跡
a: 打越遺跡 b: 中東遺跡 c: ザキヤマ遺跡 d: お伊勢山遺跡 e: 風早遺跡

第1図 遺跡分布図

群がある。遺跡の多くは、南側の入間台地と武蔵野台地に立地している。荒川低地を挟んで東側に大宮台地が位置し、さらに中川低地を挟んで下総台地の一部が埼玉県域となっている。その為、埼玉県独自の地形単位は、大宮台地と入間川より北側の丘陵と台地である。武蔵野台地は東京都と下総台地は千葉県に跨っている。

埼玉県における後期旧石器時代前半期初頭の遺跡をみると、武蔵野台地では藤久保東遺跡（1）・打越遺跡（a）・中東遺跡（b）・サガヤマ遺跡（c）。狭山丘陵ではお伊勢山遺跡（d）、大宮台地では明花向遺跡（2）・清河寺前原遺跡（3）・大木戸遺跡（西大宮バイパスNo.6）（4）・西大宮バイパスNo.5遺跡（5）。下総台地では風早遺跡（e）。県北西部では末野遺跡（6）・北坂遺跡（7）等が挙げられる。

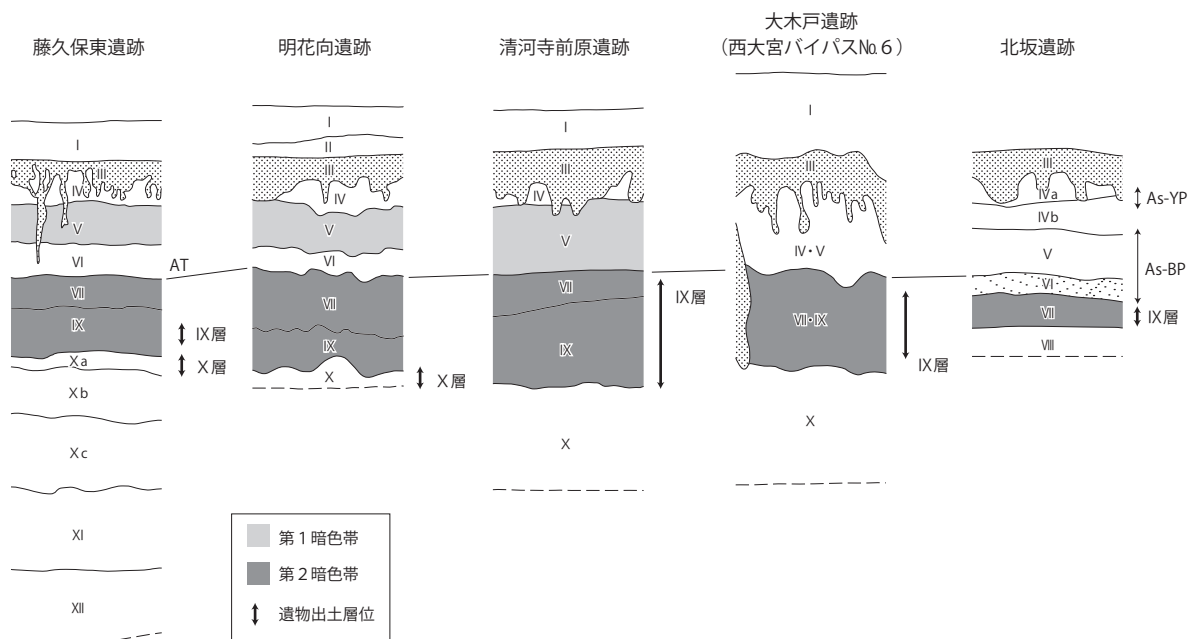
2. 出土層位

埼玉県は関東平野の中央部に位置し、ローム層の堆積は、供給源となる火山（富士・箱根系、浅間・榛名系）と遠距離にあるため、1.5 m程度と薄い。また、一次テフラが確認できるのは群馬県に近い

県北西部のみである。武蔵野台地北部・大宮台地等では層位が薄いことに加え、石器が上下に拡散する傾向がみられるため、出土層位による石器群の細分は難しい。出土層位と石器群の関係をみると、ソフトローム層中に砂川期以降の石器群が全て含まれ、ハードローム層中に第Ⅴ・Ⅳ層下部段階、第2暗色帯中から後期旧石器時代前半期の石器群が検出される。この様に、ロームの堆積状況には恵まれておらず、石器の編年を検討するには不向きであるが、一方で、南関東系と北関東系の火山灰が交差する地域ということができる。大宮台地の層位を確認すると、南部は武蔵野台地の基本層序と対比でき、上尾市周辺までは徐々に堆積が薄くなる。北本市より北側になると、第Ⅳ層のハードローム層が厚くなり、2層に分層することができる。さらに県北西部では群馬県西部の層位と対比が可能になる。

本論で対象とする石器群は、第2暗色帯中かそれより下層から出土している。なお、第2暗色帯に関しては、第Ⅶ層と第Ⅸ層に細分できる地域は限られる。

藤久保東遺跡第Ⅹ層と明花向遺跡A区第Ⅹ層



第2図 土層断面図

(註1) が埼玉県で最古の石器群になる。藤久保東遺跡は武蔵野台地北東部に位置する。武蔵野台地西部と比べて層厚は薄い、層位区分は武蔵野台地の基本層位と共通する。第1暗色帯(第Ⅴ層)の色調はあまり黒くならないため第Ⅳ層との区分が難しいところがある。一方、第2暗色帯は色調が黒く、第Ⅹ層との区分は明確である。明花向遺跡A区第Ⅹ層は、大宮台地最古の石器群である。北関東で、本石器群に対比できるのは栃木県寺野東遺跡のみである。遺跡は、大宮台地南部に位置するため、武蔵野台地の基本層位とほぼ対比できる。石器群は第2暗色帯下部(第Ⅸ層の下部)から第Ⅹ層にかけて出土した。出土状況の写真をみると、石器群の殆どが第Ⅹ層中から出土している。

清河寺前原遺跡と大木戸遺跡(西大宮バイパスNo.6遺跡)、西大宮バイパスNo.5遺跡は、大宮台地の西縁部に位置する。ローム層の区分は、調査年度の問題もあり、大木戸遺跡では、ハードロームと第1暗色帯の区分、第2暗色帯の細分をしていない。第2暗色帯に関しては、清河寺前原遺跡では細分できたが、周辺地域で第2暗色帯の細分ができる遺跡(地点)は少ない。第2暗色帯より上層と第2暗色帯という区分で見ると、ほとんど層厚が一致している。本地域はソフトローム化が進行しており、第Ⅳ層は断面ではブロック状にしか確認できない。また、第2暗色帯までソフト化している場所もみられる。清河寺前原遺跡では、石器は暗色帯に入ると直ぐに出土し始めて、暗色帯の下底部まで出土した。

北坂遺跡は、埼玉県北西部に位置する。当該地域は旧石器時代の調査事例が少ないため、白草遺跡・末野遺跡のローム層の分析データが遊離している感があったが、今回の北坂遺跡の調査によって、群馬県南西部から埼玉県北部の土層対比が可能になった。石器の出土層位は、第Ⅶ層の暗色帯中である。第Ⅳ～Ⅵ層中に浅間板鼻褐色軽石群(Ys-BP Group)が含まれている。第Ⅵ層は軽石

が濃集しており、第Ⅶ層の暗色帯をパックするようになっていた。石器は暗色帯中からの出土で、上下への拡散は少なかった。

以上、後期旧石器時代前半期初頭の石器群が検出された、主な遺跡のローム層の堆積状況を確認した。

3. 遺跡の概要

上記で取り上げた遺跡の概要を確認しておく。

(1) 藤久保東遺跡(第3図)

藤久保東遺跡は、武蔵野台地北東部に位置する。発掘調査は、1990年からマンション・個人住宅等の建設、2000～2005年にかけては区画整理事業に伴って実施された。

遺跡は、扇央部を伏流していた地下水が地表に湧き出る地点で、江川の水源に当たる。谷を囲むように、第Ⅲ～Ⅹ層の石器群が連綿と検出された。

【第Ⅹ層】

第Ⅹ層の遺構・遺物は、住宅建設に伴う発掘調査で石器集中2箇所が検出され、局部磨製石斧2点と基部加工のナイフ形石器が出土した。区画整理に伴う発掘調査では、江川旧河道埋没谷の左岸(北側)から石器集中1箇所が検出され、基部加工のナイフ形石器がまとまって出土した。

本論では、区画整理に伴って出土した石器群を検討する。

石器集中は、長径約11mの範囲に32点が散漫に分布している。検出された石器は、ナイフ形石器9点、搔・削器1点、剥片17点等で、台形様石器は出土していない。石器石材はガラス質黒色安山岩、ホルンフェルス等が用いられており、点数の少ない割に17母岩に区分されている。このことから、遺跡内での石器製作は考えにくく、製品(縦長剥片等)の状態で持ち込まれたものと考えられる。

石器(第3図1～9)

ナイフ形石器は、外形が左右対称形で先端が尖

る1～6、先端が平坦になる7・8、小形で不定形に近い剥片を用いた9に分けられる。素材剥片は、1～8は厚手の大形縦長剥片を下位に用いており、基端面に単剥離面の打面を残置している。正面の剥離面構成は、主要剥離面と同じか左右に若干振れる1～3・6～8、原石面を大きく残す4、主要剥離面と90°以上異なる6がある。調整加工は基部周辺に僅かに施されている。石器石材は9のチャート製以外は、ガラス質黒色安山岩とホルンフェルス製である。

【第IX層】

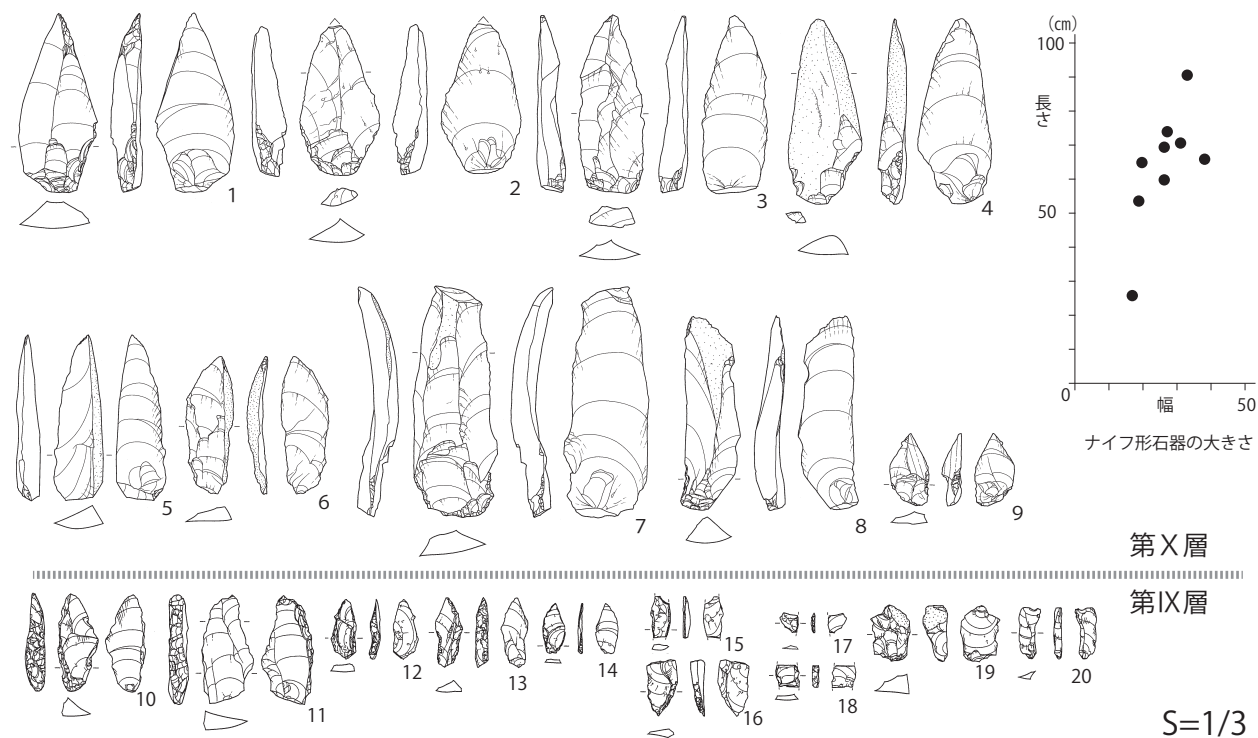
第IX層の遺構・遺物は、第X層同様に江川旧河道埋没谷の左岸から石器集中20箇所が検出された。石器集中は、第1～13号・第14～16号・第17～20号の3つのまとまりに分けられる。仮に前者からa・b・c群とすると、a群は石器集中13箇所が環状にまとまっており、環状ブロック群と考えられる。b群は、a群の北西に少し離れて石器集中4箇所が分布する。c群は、a

群の南西に少し離れて石器集中が3箇所まとまっている。

石器総数は1,429点で、その内a群から1,386点が出土している。石器石材は、全体では黒曜石が主体を占めるが、その傾向が顕著なのはa群でb・c群はチャートの方が多く出土している。石器石材の内訳は、a群は黒曜石が993点約70%、チャート211点、頁岩79点、凝灰岩87点の順である。また、黒曜石は産地分析が実施されており、伊豆の柏峠産が主体を占めている。器種組成は、ナイフ形石器9点、楔形石器2点と単純である。

石器（第3図10～18）

製品はナイフ形石器（10・16）がc群から出土している以外はa群から検出されている。11・13はチャート製で他は黒曜石製である。11は当該期に特徴的な弧状一側縁加工ナイフ形石器、他は縦長剥片を素材とした小形のナイフ形石器である。楔形石器（19・20）は不整形の剥片が用



第3図 藤久保東遺跡

いられている。剥片類は縦長を基調とするが幅広・不整形のものも多くみられる。石核および接合資料は、点数の多い黒曜石では少なく、凝灰岩・頁岩でみられる。第Ⅹ層と同様、台形様石器は検出されていない。

(2) 明花向遺跡 A 区 (第 4 図)

大宮台地の南端部、芝川右岸の台地上に位置する。標高は約 13 m で低地との標高差は 7～8 m である。当該地域のローム層の堆積は、大宮台地内では最も厚く、武蔵野台地の基本層序と対比できる。石器群は第Ⅸ層下部から第Ⅹ層(註 1)にかけて検出された。

石器集中は 4 箇所検出され、石器は 218 点出土した。石器は製品が殆どなく、石核と剥片類の接合資料が主体である。石器石材は、ガラス質黒色安山岩、チャート(註 2)、メノウが用いられている。

製品は搔・削器 1 点と彫器 1 点である。搔・削器は、メノウ製で正方形に近い剥片の端部に刃部調整が施されているが、報告書によると刃部としては形状が「ややふぞろい」とであると指摘されている。打面は自然面である。本石器は 90°回転させると、側縁の一方が調整加工、他方は自然面による側面になる。上下は剥片の鋭利な縁辺になることから、台形様石器と分類することもできる。

石器分布 (第 4 図)

調査区中央に密集度の高い石器集中が 2 箇所分布し、その南西と北西側に小規模な石器集中が分布する。石器集中と石材の関係は、南西側の第 1 号石器集中にメノウがまとまり、他の石器集中には広がらない。メノウ以外の石材はガラス質黒色安山岩である。

中央部の 2 つの石器集中は、第 2 号石器集中はガラス質黒色安山岩を主体にチャートが含まれ、第 4 号石器集中はチャートが主体を占める。接合資料はこの 2 箇所の石器集中間でほとんどが完結

している。

北東に位置する石器集中 3 はガラス質黒色安山岩の小規模なまとまりである。

接合資料 (第 4 図)

ガラス質黒色安山岩は、拳大の円礫を分割し、自然面を打面にして、分割面を取り込むように、求心的な剥片剥離を行っている。剥離された剥片は、小形で長幅比がほぼ同じものが多い。二次加工が施されているものはほとんどない。

拳大のガラス質黒色安山岩の円礫は、現在では本庄市周辺の利根川の河原で採取することができると。当時の河川流路の状況を勘案すると、遺跡周辺の河原で採取できたと考えられる。

チャートは、求心状の石核(20)と、大きな剥離面を底面に取り込むように剥片剥離された接合資料(13)がある。13 は有底剥片を連続的に剥離しているが、剥がされた剥片は不定形である。

滝沼川流域遺跡群 (清河寺前原遺跡・大木戸遺跡・西大宮バイパス No. 5 遺跡)

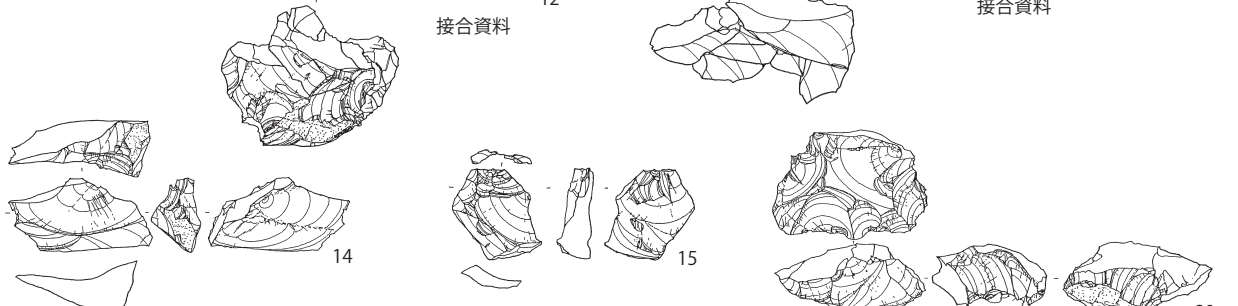
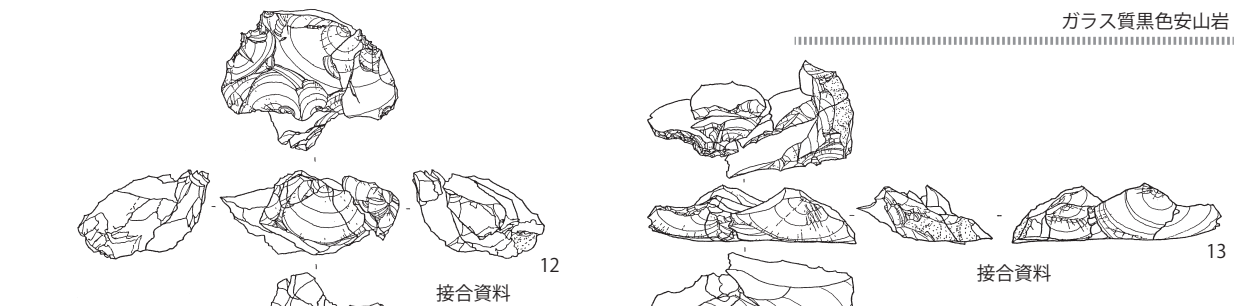
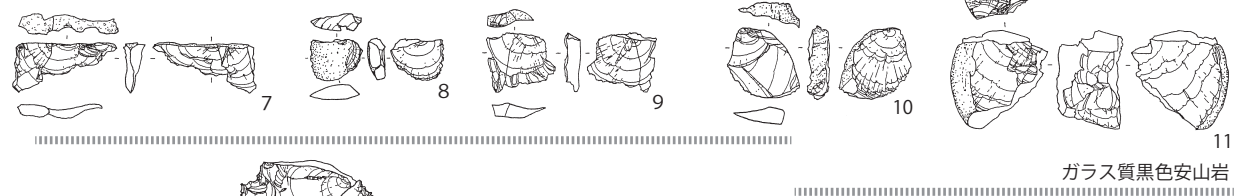
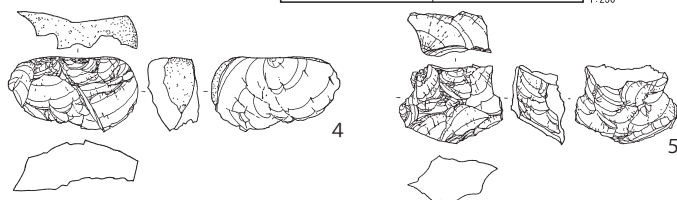
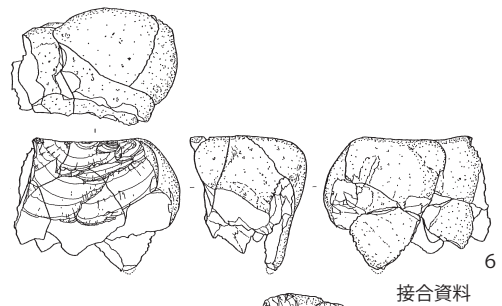
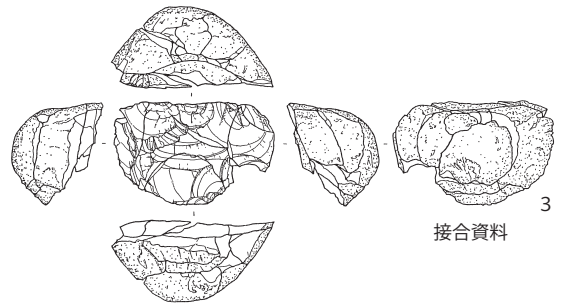
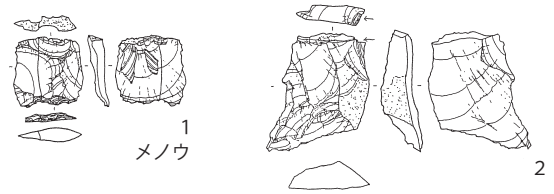
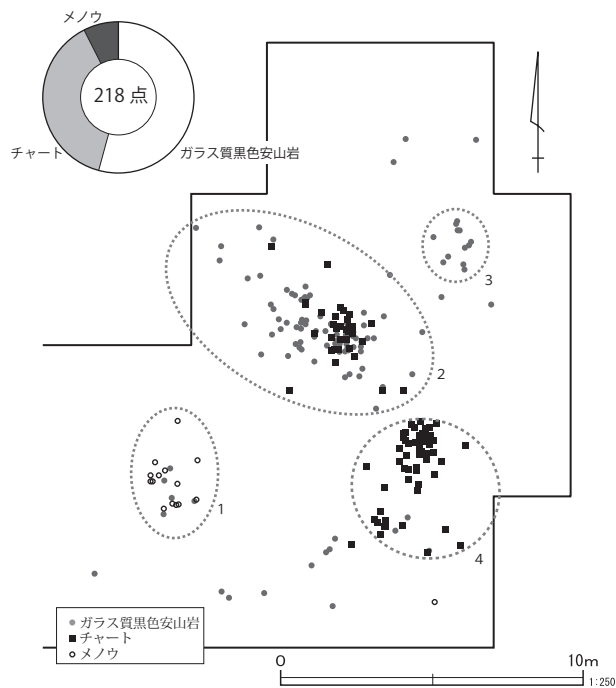
滝沼川は、大宮台地の中ほどに近い西縁部に位置する。滝沼川の流路は長さ約 2.5 km と短く、荒川に注いでいる。遺跡は、滝沼川左岸の樹枝状に開析された台地上に立地している。

当該地域は、後期旧石器時代前半期初頭の遺跡(清河寺前原遺跡・大木戸遺跡・西大宮バイパス No. 5 遺跡)がまとまっており、大宮台地を最初に開拓した人達の拠点であったと考えられる。

(3) 清河寺前原遺跡 (第 5～7 図)

大宮台地の西縁部、滝沼川流域の遺跡群の一つである。南側に谷を挟んで大木戸遺跡・西大宮バイパス No. 5 遺跡が立地している。

後期旧石器時代前半期初頭の石器群は、台地の西縁部に沿って、約 100 m 離れた 2 地点から検出された。両地点の石器群の様相は異なっており、時期差も想定されるが、石器群の出土層位からは新旧関係を検証できない。



S=1/3

第4図 明花向遺跡A区

【第1地点】

第1地点では、石器集中2箇所が検出され、石器54点が出土した。石器石材は、主にガラス質黒色安山岩と流紋岩が使われている。製品は搔・削器1点で他は石核と剥片類である。接合資料は少ないが、求心状の石核に横広の剥片が接合している。

【第2地点】

第2地点では、大宮台地で唯一の環状ブロック群が検出された。南北約20m、東西約15mの範囲に複数の密集部が環状に分布する。石器集中の分布は、完全な環状ではなく、北側にやや乱れた部分があるため、全体で環状ブロック群とするが、環状ブロック群とそれに伴う石器集中とするかは見解が分かれる（註3）。しかし、同一時期の石器群として問題はないと考えられる。（第6図）

出土石器は1,474点と多く、環状ブロック群の中でも中規模以上である。石器石材は、黒曜石が1,293点で約88%を占めている。他はガラス質黒色安山岩137点、トロトロ石27点と続いており、この3石材によって剥片石器のほとんどを占めている。器種組成は、当該期に特徴的な局部磨製石斧、打製石斧は出土しなかったが、ナイフ形石器、台形様石器、搔・削器、石錐など充実した内容である。

石器（第5図）

報告書ではナイフ形石器26点、台形様石器19点と分類した。分類基準は、縦長剥片を主に用いて縦長のものをナイフ形石器、幅広の剥片を主に用いて台形状になるものを台形様石器と区分したが、報告書内でも述べたように、形態は漸移的である。本論では一括してナイフ形石器・台形様石器とする。

他の製品は、搔・削器10点、石錐3点、敲石2点等である。

本遺跡から、大形の縦長剥片が多く出土してお

り、製品の素材には困らないと思うがナイフ形石器・台形様石器に使われている素材剥片は、不整形のものが目に付く。調整加工は、平坦剥離と微細剥離で Blunting 加工は部分的である。調整加工の方向は、左右の側縁で正面→裏面、裏面→正面と異なるものが多く、石器製作の際に正面を意識し、平面を基軸として回転させながら加工を施すのではなく、便宜的に石器を回して調整加工が施されていたと想定させる。

接合資料（第7図）

清河寺前原遺跡では、黒曜石・ガラス質黒色安山岩・トロトロ石の接合資料が多く得られた。その中で、黒曜石で原石の形状が想定できる資料を幾つか取り上げて検討する。

接合 25

剥片6点が接合し、拳大の円礫に復元された。自然面の状態から原石の大きさが想定される。原石面の約半分が接合し遺跡内に残されていたが、中心部はみつかっていない。

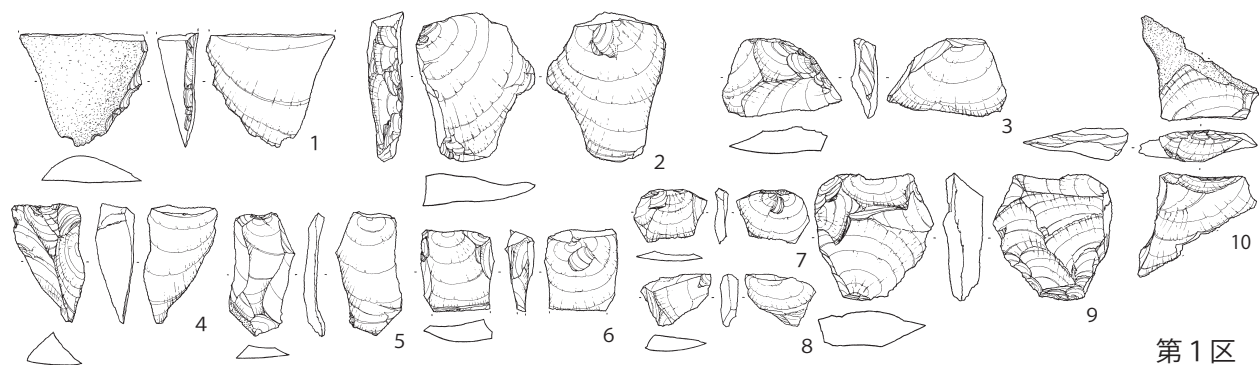
接合した剥片は、正面に自然面を大きく残した大形の剥片である。打面は初期段階の剥片（1・2）は自然面、剥片剥離が進行すると先行した剥離面を打面としている。その際、打面調整等は行っていない。

接合 26

剥片4点が接合し、拳大の円礫に復元された。自然面の状態から原石の大きさが想定される。原石面の約1/3が接合し遺跡内に残されていたが、接合25と同じく中心部はみつかっていない。

接合した剥片は、正面に自然面の大きく残した剥片である。打面は初期段階の剥片（7）は自然面、他の剥片（8~10）は単剥離面で打面調整等は施されていない。

接合25・26は遺跡内に拳大の円礫を持ち込み、原石面の外皮部分をそぎ落とすように剥離している。遺跡内には原石面を取り除いた後の、中心部分は出土していない。接合資料の分布状況はとも



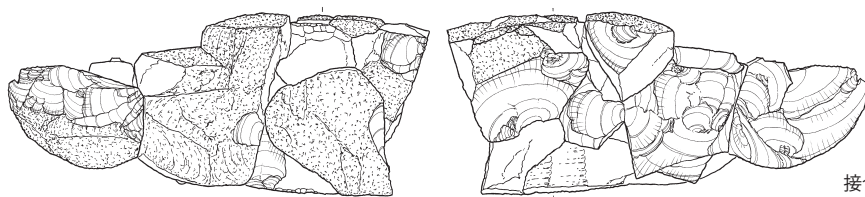
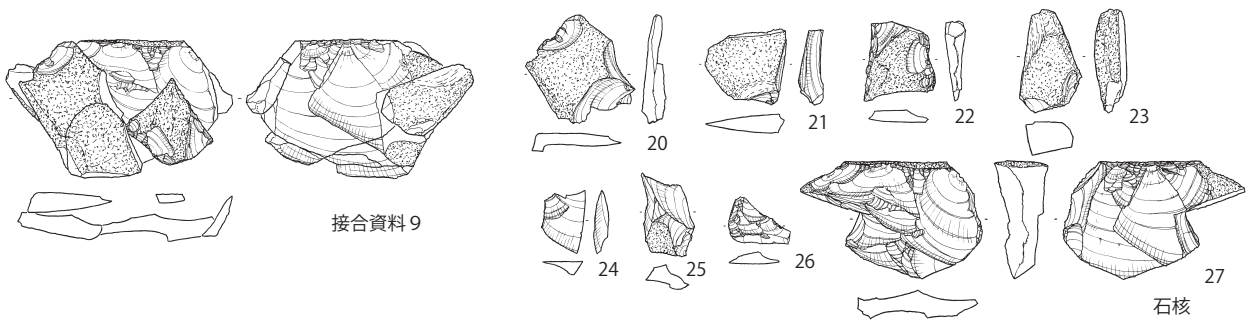
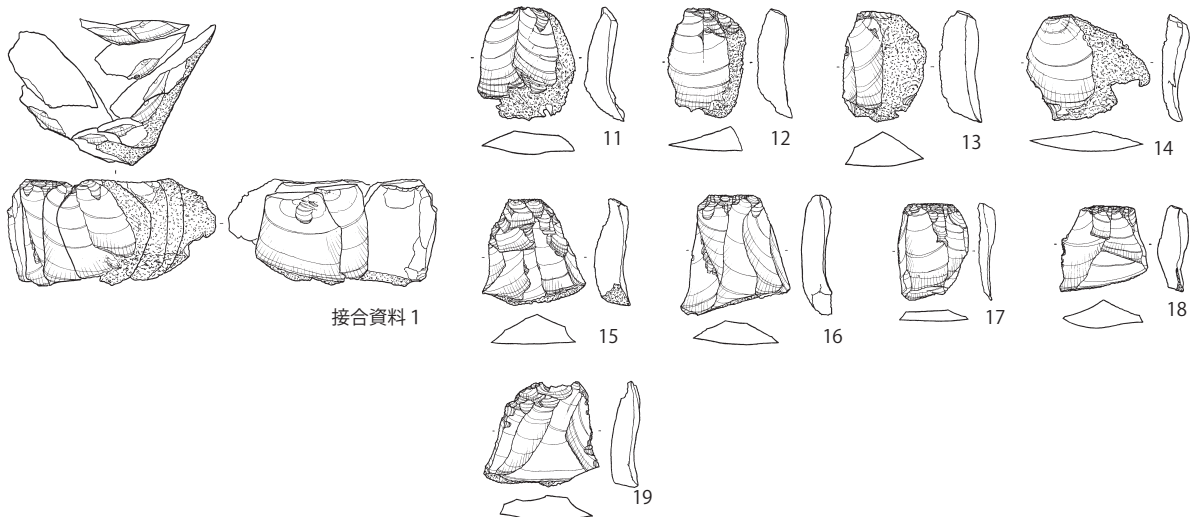
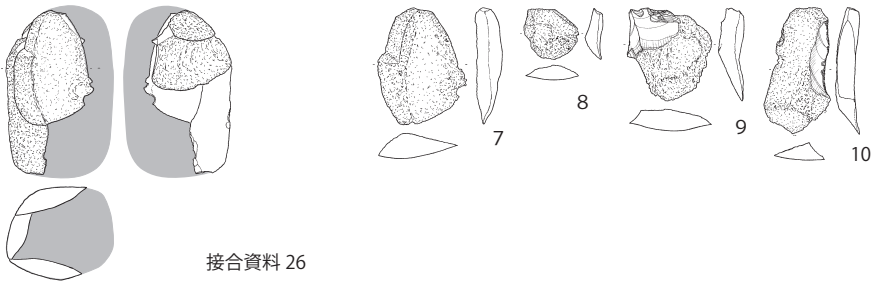
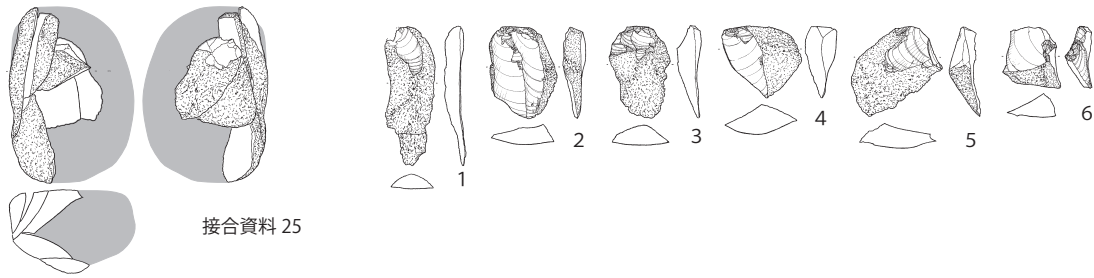
第1区



第2区

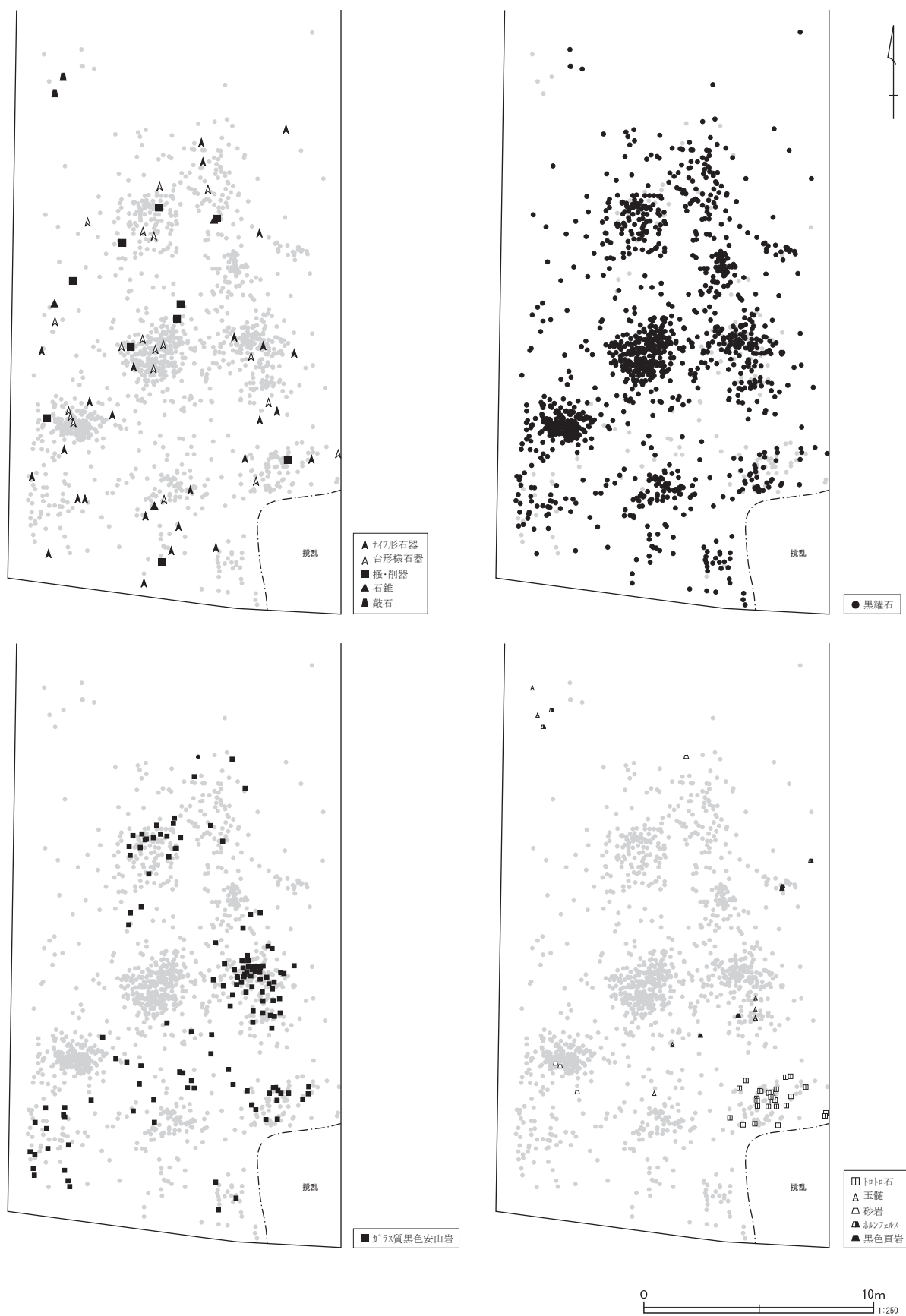
S=1/3

第5图 清河寺前原遗迹第1·2区石器实测图



第6図 清河寺前原遺跡第2区接合資料

S=1/3



第7図 清河寺前原遺跡第2区遺物分布図

に近接しており、狭い範囲にまとまっている。なお、剥離された大形の剥片は使用されておらず、原産地からこれほど離れた地点にある遺跡で浪費的な石材運用といえる。

接合 1

剥片 9 点の接合資料で、石核は出土していない。分割した礫を素材に、分割面を打面に連続的に剥片剥離を行っている。打面調整は施していないが、剥片剥離が進行したものは、頭部調整が丁寧に施されている（15～18）。剥片の正面は、初期段階のものは自然面を大きく残し、剥片剥離が進行したあとは上位からの剥離面によって構成されている。

剥片の形状は整っており、規格的な剥片を連続的に剥離しているが、製品に加工されているものはない。

石器は環状部の西側で、密集部を跨るように広い範囲で接合している。

接合 9

剥片類 7 点と石核の接合資料である。板状礫を原石として、両面の自然面を取り除くように剥離を施している。22 は右側縁の刃部加工を施した搔・刮器である。石核（27）は、両面と上位からの剥離面が観察される。剥片類は正面に自然面を残す不定形のものが多い。

石器は、環状部の西側に分布する。

接合 6

大形の角礫を素材としている。正面はほぼ原石面、裏面は一部に原石面を残している。上記の接合資料と比べると、不純物が多く含まれており、あまり良質な黒曜石とはいえない。幾つかに分割したものを石核としている。剥離された剥片類は不定形で小形のものが多い。

石器は、環状部中央の密集部に分布している。

（4）大木戸遺跡（西大宮バイパスNo.6 遺跡）（第 8 図）

大宮台地の西縁部、滝沼川流域の遺跡群の一つ

である。谷を挟んで東側に西大宮バイパスNo.5 遺跡、北東側に清河寺前原遺跡が立地している。

石器集中は、台地の西縁部近くから 1 箇所検出された。石器の分布は、南東側の密集部との間にやや空白部をもって、北西側に散漫な分布が広がっている。この 2 つのまとまりの間で接合関係はみられない。

石器は、総数 186 点が出土し、ガラス質黒色安山岩が 161 点で約 87% を占めている。器種組成は石核と剥片類が殆どで、石核に剥片類が接合している。

明花向遺跡 A 区のガラス質黒色安山岩の接合資料と似ており、拳大の円礫を分割し、その分割面を取り込むように、自然面を打面とし求心状に剥片剥離を行っている。

（5）西大宮バイパスNo.5 遺跡（第 8 図）

大宮台地の西縁部、滝沼川流域の遺跡群の一つである。谷を挟んで西側に大木戸遺跡、北側に清河寺前原遺跡が立地している。

台地の西側縁辺近くから、石器集中 2 箇所が検出され、石器 200 点が出土した。ローム層の堆積は薄く、ソフトローム層（第Ⅲ層）、ハードローム層（第Ⅳ・Ⅴ層）、暗色帯（第Ⅶ・Ⅸ層）の区分である。遺物は暗色帯中から出土している。

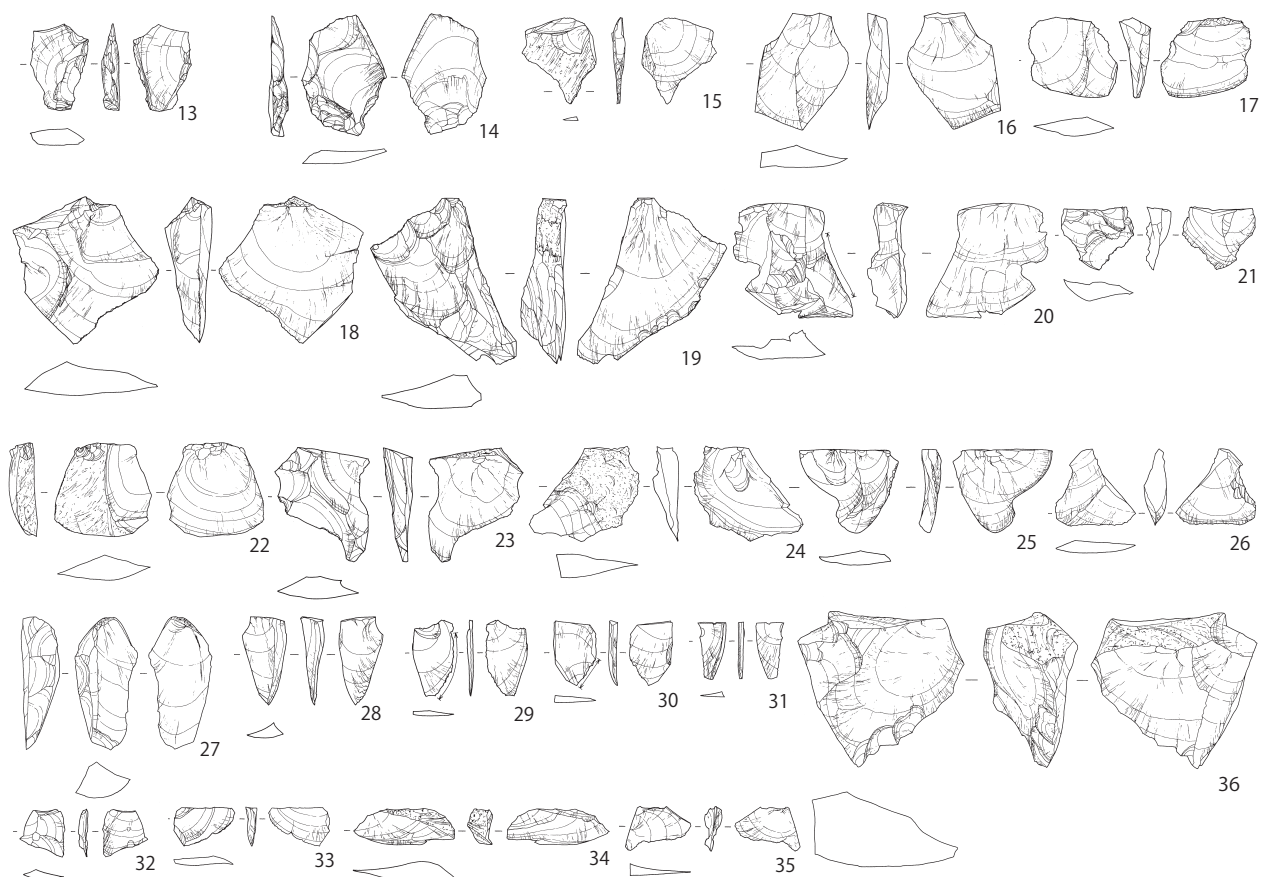
石器石材は、報告書内でやや混乱しているが、実見したかぎり、珪質頁岩・黒色頁岩（註 4）が主体になると思われる。1・2 は台形様石器である。剥片類は、大形のものは自然面を打面とし、石核素材の分割面を大きく取り込んでおり厚手である。小形のものは、縦・横長の薄手の剥片がみられる。

（6）末野遺跡（第 9 図）

寄居町末野に位置する。石器の点数は 48 点と少なく、約 10 m の範囲に散漫に分布している。石器は局部磨製石斧 2 点、打製石斧 2 点、基部加



大木戸遺跡（西大宮バイパスNo.6）



西大宮バイパスNo.5 遺跡

S=1/3

第8図 大木戸遺跡・西大宮バイパスNo.5 遺跡石器実測図

工のナイフ形石器、台形様石器、大形縦長剥片等である。石器石材は、剥片類が主に頁岩、斧形石器は頁岩、黒色頁岩、ホルンフェルス、ガラス質黒色安山岩と多様である。

石器（第9図）

ナイフ形石器3点、台形様石器1点が出土した。1は大形縦長剥片の基部に僅かに調整加工を施している。2は先端の一部に調整加工を施している。3は幅広の剥片を用いて、打面を取り除くように基部を丸く整形している。台形様石器は、横広で正面に自然面を残す。調整加工は僅かで、左側面の打面に正面方向から一部剥離が施されているだけである。斧形石器の調整剥片を用いたと思われる。

（7）北坂遺跡（第9～11）

北坂遺跡は深谷市本郷に所在する。遺跡は、松久丘陵が開析によって分断され、独立丘陵となった諏訪山の南端部に位置する。遺物の出土状況は、層位の項で述べたように武蔵野台地や大宮台地と異なり、群馬県西部に近い堆積状況を示す。

石器は径約30mの範囲（第11図）にまとまっている。石器集中として23箇所に分したが、大きくは西側の密集部、その東側に径約20mの環状の分布、さらにその周辺の散漫な分布に大別できる。西側の密集部は、頁岩1と珪質頁岩1がまとまって出土しており、良好な接合資料が得られた。環状ブロック群とはしなかったが、石器集中が一定の範囲にまとまる傾向は当該期の特徴である。清河寺前原遺跡と比べると分布範囲が広く、石器の点数は少ない。

石器は399点、礫は295点検出された。礫に関しては人為的なものか自然によるものか報告書作成時には判断できなかったが、被熱していない点、大きさが小礫から幼児の頭位のものまで漸移的な点、接合関係がみられない点、大形の礫に関しては表面の風化が進んでいる点などの状況から

人為的に遺跡内に持ち込まれたとは考えにくく、自然の営力によってローム層中に包蔵されたものと考えられる。

石器石材は、頁岩150点、黒曜石69点、ガラス質黒色安山岩58点、珪質頁岩55点、赤玉石4点等が出土している。なお、黒曜石は産地分析の結果、和田峠産と推定されている。

石器（第9図）

報告書で搔・削器としたものの一部は、本論では台形様石器とする。石器石材は、ナイフ形石器は頁岩、台形様石器は黒曜石を主にチャート、頁岩製がある。

ナイフ形石器は、剥片を下位に用いている。調整加工は、一側縁は基端部から先端までBluntingが施され、背縁部は素材剥片の打面を側面としている。一見、二側縁加工に見える。

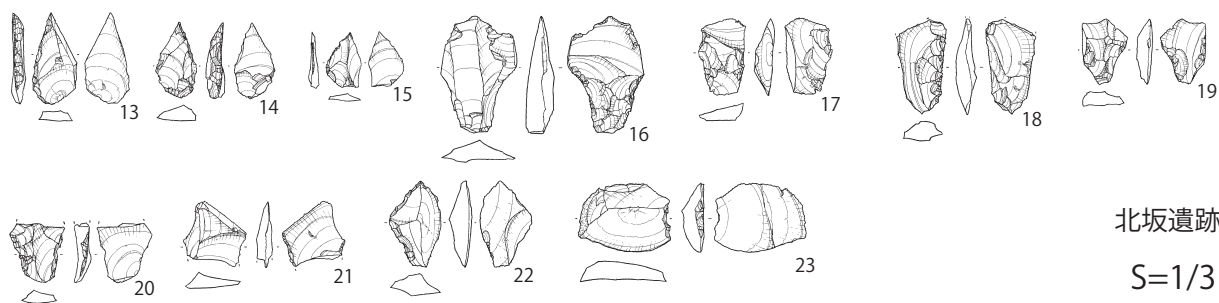
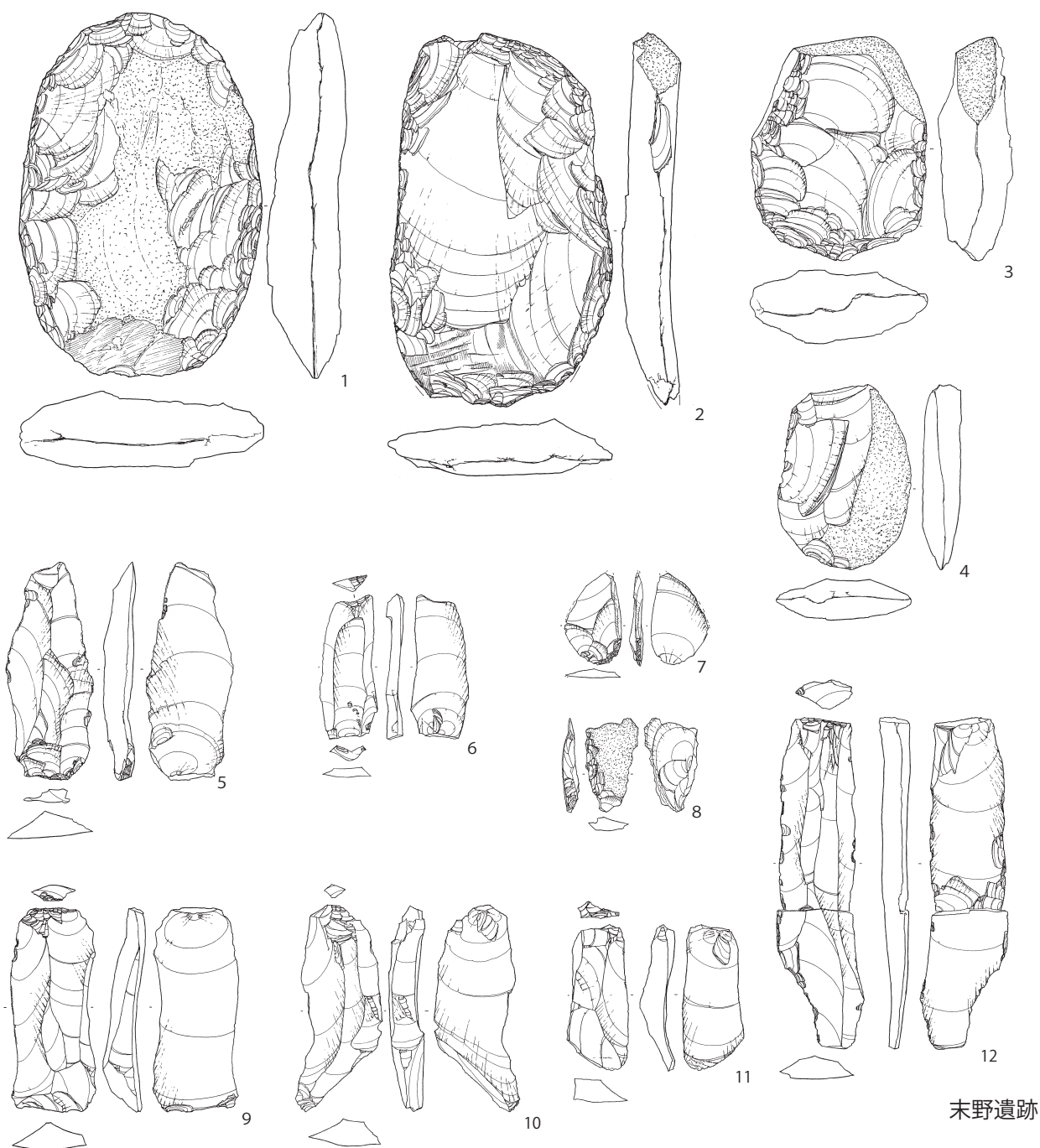
台形様石器は、4は裏面基部を平坦剥離によって整形している。5・6は剥片の端部を折断し台形にしている。調整加工は4と同じく平坦剥離である。9はチャート製でBlunting状の調整加工によって先端を錐状に作り出している。10・11は報告書で搔・削器としたが本論では台形様石器とする。11は明花向遺跡A区の搔・削器と石器石質は異なるが、調整加工の在り方などは近似している。

接合資料（第10図）

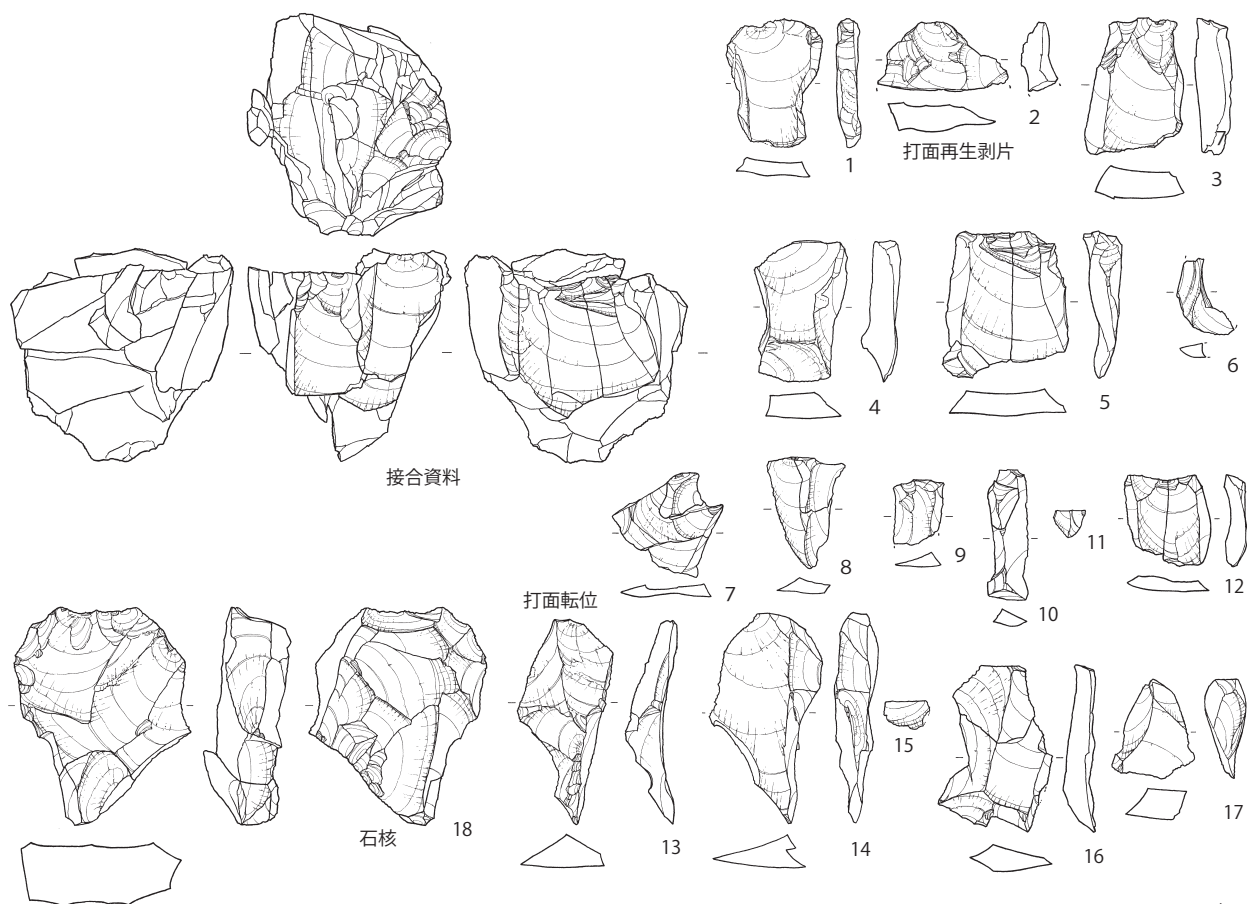
頁岩1

頁岩の母岩1と分類した48点中、27点が接合した。

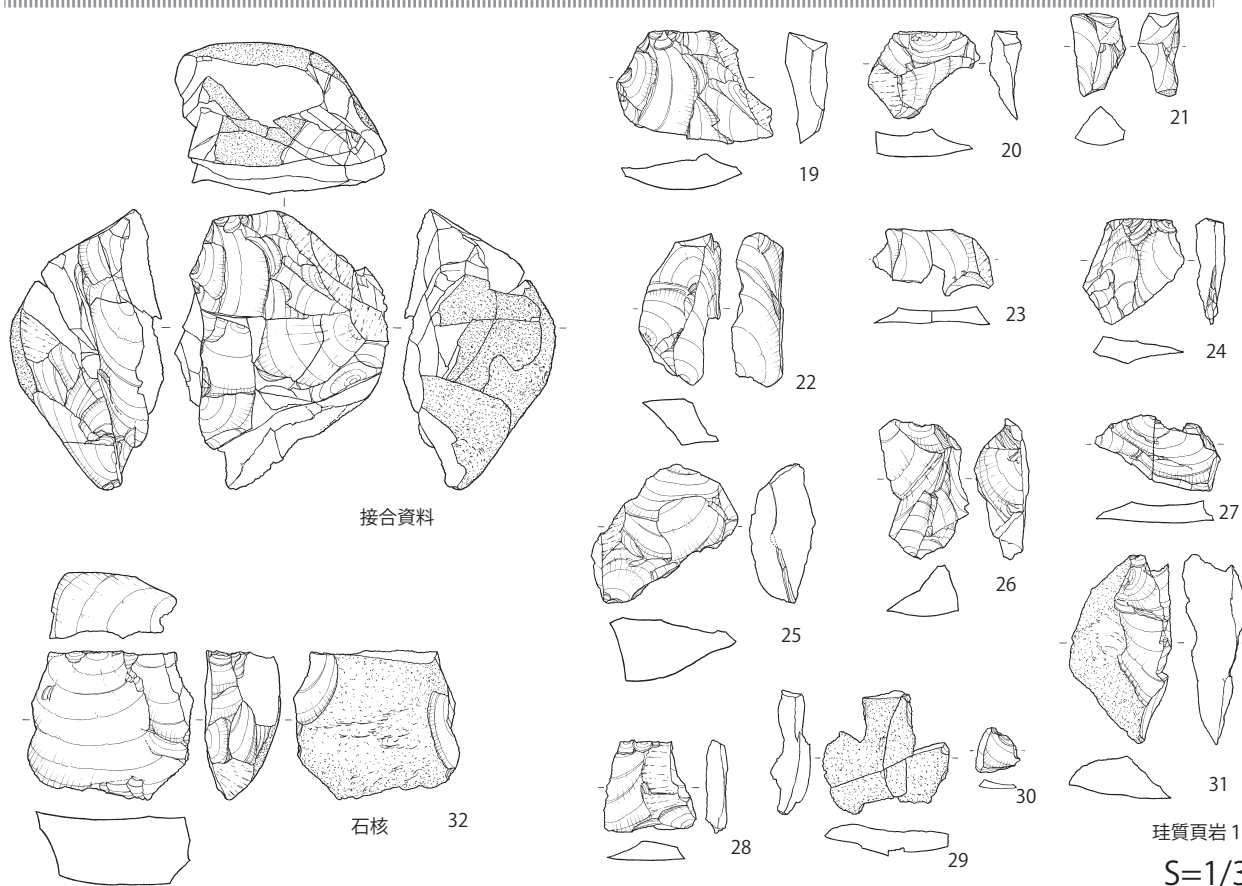
剥片剥離の初期段階は、小口型の石核から縦長の剥片を連続して剥離している。1を剥離した後、2の打面再生剥片を剥離しているので、1と3以降では打面が異なる。3～5まで連続して剥離した後、石核側面の調整剥離（6～11）を行っている。打面を90°転位している。転位後は求心状の剥片剥離で、13～16の縦長の剥片を剥離している。剥片の形状は、打面転位前は厚手で両側



第9図 末野遺跡・北坂遺跡石器実測図

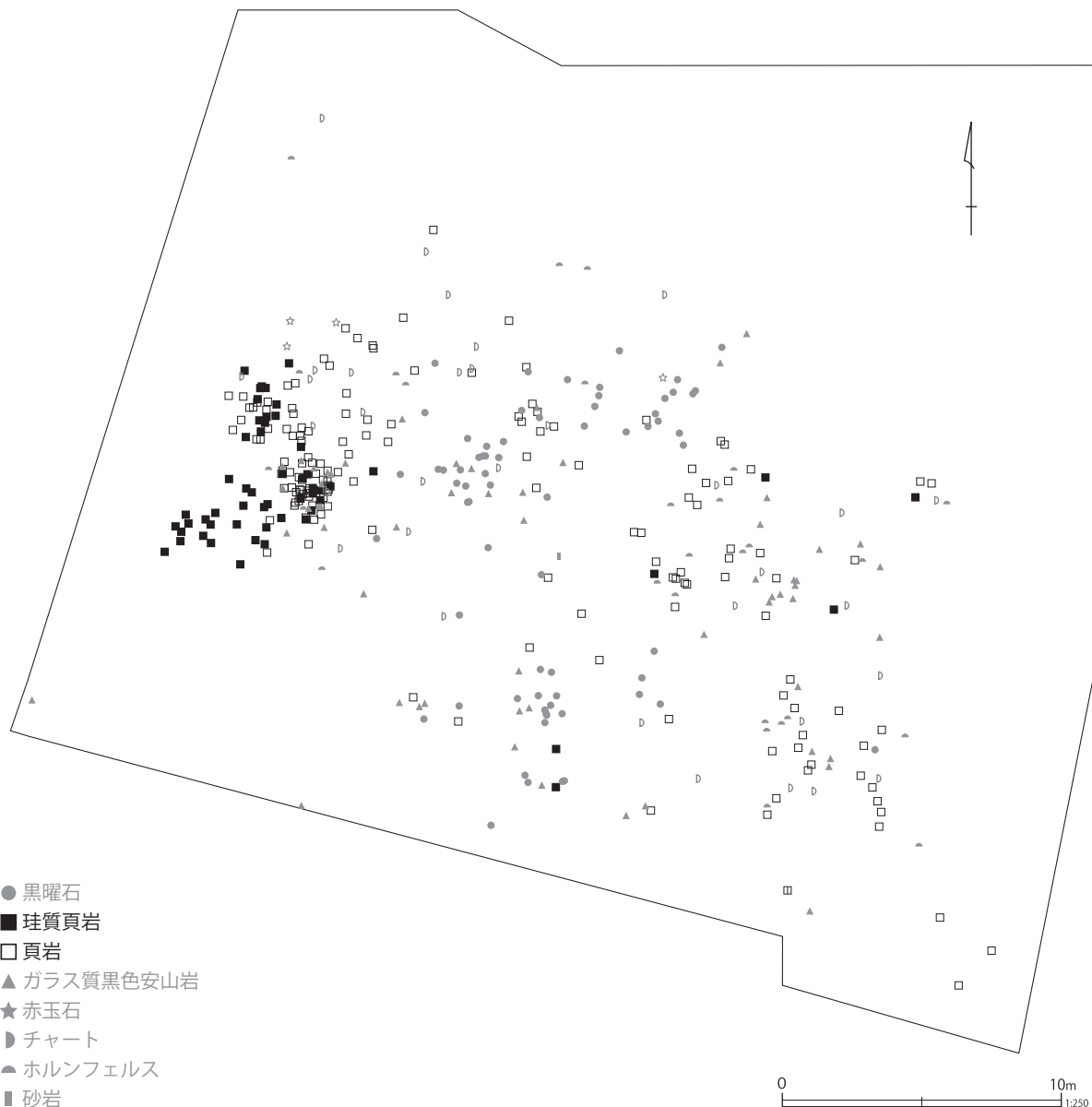


頁岩 1



S=1/3

第 10 図 北坂遺跡接合資料



第 11 図 北坂遺跡遺物分布図

縁が平行する剥片、打面転位後は薄手で先端が細く尖る剥片が剥離されている。残核は求心状の石核である。

珪質頁岩 1

珪質頁岩の母岩 1 と分類した 29 点中、21 点が接合した。

円礫を分割したものを素材に、分割面を取り込む様に自然面を打面に剥片剥離を行っている。剥片は打面が厚く、横広の剥片が何枚か剥離されている。残核は作業面を正面とした単設打面である。

西大宮バイパスNo.5 遺跡の珪質頁岩の剥片類

と、石材及び剥片の形態が近似している。

4. 編年的位置付け

以上、後期旧石器時代前半期初頭の遺跡を概観した。それをみると、石器形態、石器石材の運用など多様な様相がみられる。当該地域では、第Ⅹ層と第2暗色帯（第Ⅸ・Ⅶ層）は、出土層位によって区分が可能であるが、第2暗色帯中の石器群の細分は難しい。その為、周辺地域の石器群を含めて検討する。

【第Ⅹ層段階】

第Ⅹ層段階は、藤久保東遺跡と明花向遺跡A区が相当するが、石器群の様相は大きく異なっている。

藤久保東遺跡は、ガラス質黒色安山岩とホルンフェルスを用いた、大形の縦長剥片を素材に基部加工のナイフ形石器が主体を占め、台形様石器は伴っていない。遺跡内での剥片剥離作業の痕跡はなく、大形の縦長剥片・ナイフ形石器等の形で持ち込まれた可能性が高い。そのため、遺跡の機能が石器組成に強く反映していると考えられる。なお、藤久保東遺跡第Ⅸ層や同市内に所在する中東遺跡第2・3地点第Ⅸ層、サガヤマ遺跡第1地点第Ⅸ層においても台形様石器は共伴していない。これは、地域的な特性かもしれない。

近似する石器群としては、長野県八風山遺跡群、東京都多摩蘭坂遺跡第8地点B区第1文化層等が挙げられる。多摩蘭坂遺跡第8地点は、第Ⅹ層下部から出土している。A区から台形様石器、局部磨製石斧がまとまり、B区から縦長剥片を素材とするナイフ形石器が出土した。この2つの石器群は、従来段階差と考えられてきたが、多摩蘭坂遺跡で同一層位から出土したことによって、最古段階の石器群に縦長剥片が伴うのか問題になった。2006年に岩宿フォーラム／シンポジウムで諏訪間順（2016）は、縦長剥片の共伴を積極的に評価している。

一方、明花向遺跡A区の石器群は、ガラス質黒色安山岩とチャートを主体に218点の石器が出土したが、2次加工のある製品はほとんどなく、僅かにメノウ製の搔・削器が検出されただけである。この石器に関しては、上記で台形様石器の可能性を指摘した。不定形剥片を主体に定型的な製品を含まない石器群である。石器石材は異なるが、最古段階の中山谷遺跡、西ノ台B遺跡、武蔵台遺跡と共通性がみられる。

【第Ⅸ層古段階】

大木戸遺跡（西大宮バイパスNo.6）と清河寺前

原遺跡1区は、ガラス質黒色安山岩等を主体に定型的製品は殆ど伴わない。大木戸遺跡はガラス質黒色安山岩の拳大の円礫を分割して、横広剥片を剥離しており、明花向遺跡A区石器群に近似している。

末野遺跡は石器の点数が少なく、器種組成上の問題はあるが局部磨製石斧、打製石斧とともに大形縦長剥片、ナイフ形石器等が出土した。第Ⅹ層段階の藤久保東遺跡等との関連が注目される。

清河寺前原遺跡第2区は、大宮台地で唯一の環状ブロック群が検出され、石器点数が1,474点と埼玉県の当該期の遺跡としては最大規模である。石器石材は、良質の黒曜石が約88%を占めて、続いてガラス質黒色安山岩、トロトロ石が用いられている。ガラス質黒色安山岩は、明花向遺跡A区、大木戸遺跡で拳大の円礫が用いられているのに対し、清河寺前原遺跡では大形の円礫を分割した後、小口型石核としている。用いられる石器石材の大きさが異なっている。トロトロ石に関しては、大宮台地では見られない石材である。黒曜石は、肉眼観察であるが信州系と考えられる。

接合資料は多く、黒曜石、ガラス質黒色安山岩、トロトロ石でみられる。黒曜石に関しては上記で検討したように、原石の状態で遺跡内に持ち込まれ、浪費的ともいえる剥片剥離を集中的に行っている。

ナイフ形石器・台形様石器は、形態が漸移的である。調整加工は両側縁で方向が異なり、正面感が希薄なことが窺える。信州系の黒曜石を集中的に用いている遺跡は、原産地近くでは追分遺跡が挙げられるが、他の長野県野尻湖遺跡群、群馬県堀内遺跡群は、清河寺前原遺跡と同様に原産地とは遠距離にある。

【第Ⅸ層新段階】

第Ⅸ層新段階と考えられる遺跡は、藤久保東遺跡第Ⅸ層の黒曜石製の小形ナイフ形が伴う一群と、北坂遺跡のナイフ形石器と精製台形様石器が

伴うグループがみられる。

前者は、藤久保東遺跡と同じ市内に所在する中東遺跡第2・3地点第IX層、サガヤマ遺跡第IX層が挙げられる。3遺跡とも柏峠産の黒曜石が多用されている。藤久保東遺跡では良好な接合資料はなかったが、中東遺跡、サガヤマ遺跡は角礫の原石が遺跡内に持ち込まれ、縦長剥片を集中的に剥片剥離されていることが復元できる。ナイフ形石器の調整加工は、二側縁に Blunting が施されている。

北坂遺跡はナイフ形石器に頁岩、台形様石器に黒曜石が用いられている。ナイフ形石器は、藤久保東遺跡の一群と同じく調整加工は Blunting が施されている。台形様石器は平坦剥離が多く用いられ、調整加工は正面から裏面方向に施されている。整形加工の際、正面の意識が明確になっていると思われる。北坂遺跡と同じ組み合わせは、群馬県三和工業団地Ⅰ遺跡でみられる。三和工業団地Ⅰ遺跡は、ナイフ形石器が大形の基部加工と小形の二側縁加工が組み合わせられ、北坂遺跡よりも複雑な様相もあるが、遺跡の規模による可能性もある。

5. まとめ

埼玉県で検出された後期旧石器時代前半期初頭の石器群を3期に分け、その中を、石器形態と石器石材の運用によって幾つかのグループに細分した。

【第X層段階】

2つのグループに分けられる。藤久保東遺跡は、

大形縦長剥片を用いて基部加工のナイフ形石器が作られている。末野遺跡は出土層位から第IX層石器群であるが、大形縦長剥片を用いたナイフ形石器が局部磨製石斧等とともに出土しており、この系統を縦長剥片系aとする。

明花向遺跡は、ガラス質黒色安山岩、チャートと用いて、不定形の剥片類を剥離している。定型的な製品はほとんど伴わない、同じ様相を呈する石器群は、第IX層段階の大木戸遺跡（西大宮バイパスNo.6）、清河寺前原遺跡第1地点が挙げられる。本石器群と第X層下部（立川ローム最古段階）の中山谷遺跡、西ノ台B遺跡、武蔵台遺跡のチャート石器群との関連が注目される。従来、チャート石器群が段階的に古く、後続して縦長剥片（石刃）石器群が出現するとし、2つの石器群を段階差とする考えが多かったが、諏訪間他（諏訪間、仲田、中村、砂田 2006）によって2つの石器群が時間的に分離できないとの意見がある。

チャート石器群がどの様に解消されていくのかは、二極構造の中で解釈されてきたが、具内的な資料での検討例は少なかった。明花向遺跡の石器群を再検討する中で、最古段階の石器群に多く用いられるチャートは、節理が多く剥片剥離のコントロールが難しくブロック状に割れてしまうため観察が難しいが、明花向遺跡のチャートでは珪質頁岩に近く、剥片剥離の状況が観察できる。また、ガラス質黒色安山岩が多く用いられている。この様に石器石材の違いによって石器群の様相は異なるが、不定形剥片が主体で定型的製品をほとんど

第X層	第IX層下部	第IX層上部	
明花向遺跡A区	大木戸遺跡(西大宮バイパスNo.6)他		不定形剥片系
藤久保東遺跡第X層	末野遺跡		縦長剥片系a
		藤久保東遺跡第IX層・中東遺跡他	縦長剥片系b
	清河寺前原遺跡	北坂遺跡	精製台形様石器系

第 12 図 石器群変遷図

持たない点は共通する。

この系統を不定形剥片系とする。

【第Ⅸ層古段階】

3つのグループに分けられる。末野遺跡は第Ⅹ層段階の縦長剥片 a 系統、清河寺前原遺跡第 1 区と大木戸遺跡（西大宮バイパスNo.6）は不定形剥片系統と捉えられる。

本段階で出現する石器群は、清河寺前原遺跡第 2 区の環状ブロック群から出土した。良質な黒曜石を主に、精製台形様石器を伴う系統である。本石器群は、ナイフ形石器と台形様石器が形態に漸移的に変化するため区分が難しい。また、調整加工は両側縁で加工方向が異なるものが多い。埼玉県では、当該期の遺跡は清河寺前原遺跡第 2 区のみであるため、群馬県の事例を含めた検討が必要である。この系統は精製台形様石器系とする。

【第Ⅸ層新段階】

2つのグループに分けられる。北坂遺跡は前半期の精製台形様石器の系統で捉えられる。ナイフ形石器と台形様石器は形態・調整加工等によって明確に区分できる。台形様石器の調整加工は、裏面を中心に主に平坦剥離が施される。前段階の様に両側縁で調整方向が異なるものはない。黒曜石は使われているが、前半期の様に原石を遺跡内に持ち込んで剥片剥離を行っている痕跡はみられない。精製台形様石器系の新段階と考えられる。

藤久保東遺跡は、黒曜石の良好な接合資料はなかったが、中東遺跡・サガヤマ遺跡では柏峠産の原石の形状が分かる接合資料が得られた。柏峠産の黒曜石という岩石の特異性もあるが、ナイフ形石器は小形の二側縁加工のものが主体をしめ、北坂遺跡同様新しい様相と考えられる。縦長剥片を用いる石器群であるが、藤久保東遺跡第Ⅹ層等の縦長剥片系 a とは異なると考えられるのため、縦長剥片系 b とした。

以上の点を、概略的に整理した表を第 12 図に示した。

おわりに

以上、埼玉県内の資料を検討したが、石器群の内容は想定以上に多様であることが分かった。

今後、今回抽出した石器群が広域の中でどのように展開するのか。又は、地域的石器群なのかを検討して行きたい。

清河寺前原遺跡、北坂遺跡の発掘調査、整理・報告書作成の際に、尾田識好、織笠明子、亀田直美、小菅将夫、砂田佳弘、須藤隆司、諏訪間 順、仲田大人、橋本勝男氏をはじめ多くの人から貴重な助言を賜った、記して感謝したい。

註

- 註 1 明花向遺跡の報告書では、武蔵野基本層位の第Ⅷ層が確認できないことから、第Ⅸ層を第Ⅷ層、第Ⅹ層を第Ⅸ層と表記している。本稿では武蔵野台地基本層に合わせて層位名を表記した。
- 註 2 チャートは縁辺が透き通るものと、透明度はなく緻密な頁岩と言えるものまで多様である。明花向遺跡でチャートとされた石材と、北坂遺跡の珪質頁岩は実見する限り近い石材と考えられる。
- 註 3 報告書では出土した全ての石器を帰属させるため、石器集中 18 箇所と分布の散漫な範囲をエリアとして区分し出土した。環状ブロック群の範囲は全体で捉えた。島田（2012）は、南側部分で円形に配列した範囲を環状ブロック群として捉えている。
- 註 4 報告書では、文中と石材別遺物分布図で石材名が異なっている等の混乱もあるが、説明では「緻密な黒色の安山岩」が主体としているが、報告者の田代氏はその後の（1997）、石器石材は頁岩、珪質頁岩、ガラス質黒色安山岩と記している。筆者も肉眼で実験した限り、珪質頁岩と黒色頁岩が主体であると考ええる。なお、大形の剥片類には北坂遺跡第 2 次調査の珪質頁岩 1 としたものに近似している。

引用・参考文献

- 越前谷 理 2015 『サギヤマ遺跡第1地点発掘調査報告書』三芳町埋蔵文化財報告 40
- 大久保 淳 2011 『中東遺跡第2地点・第3地点』三芳町埋蔵文化財報告 37
- J.E. ギダー・小田静雄 1975 『中山谷遺跡』国際基督教大学考古学研究センター
- 佐藤宏之 1988 「台形様石器研究序論」『考古学雑誌』73-2 日本考古学会 pp.1-37
- 佐藤宏之 1992 『日本旧石器文化の構造と進化』柏書房
- 佐藤宏之 2004 「末野と正面ヶ原D」『山下秀樹氏追悼考古学論集』山下秀樹氏追悼論集刊行会 pp.25-33
- 佐藤雅一・古谷雅彦・中村真理 2001 『正面ヶ原D遺跡』津南町文化財調査報告書第34輯
- 津島秀章 2009 「集合と分散—石器原産地からみた中型環状ブロック群の構造—」『研究紀要27』群馬県埋蔵文化財調査業団
- 津島秀章他 1999 『三和工業団地I遺跡(1)—旧石器時代編—』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団報告書第246集
- 島田和高 2012 『氷河時代のヒト・環境・文化』2012年度明治大学博物館特別展
- 須藤隆司 1999 『八風山遺跡群』佐久市埋蔵文化財調査報告書第75集
- 諏訪間 順 2006 「旧石器時代の最古を考える—「X層」研究の意義」『岩宿時代はどこまで遡れるか—立川ローム層最下部の石器群—』岩宿フォーラム2006／シンポジウム pp.2-21
- 大工原 豊他 1988 『古城遺跡』安中市教育委員会
- 田代 治 1989 『西大宮バイパスNo.5遺跡 一般国道16号バイパス関係Ⅲ』大宮市遺跡調査会報告第24集
- 田代 治 1995 『西大宮バイパスNo.6遺跡 一般国道16号バイパス関係Ⅳ』大宮市遺跡調査会報告第48集
- 田代 治 1997 「2. 大宮台地の概要」『埼玉考古別冊第5号—特集号 埼玉の旧石器時代』埼玉考古学会 pp.7-13
- 田中英司 1984 『明花向・明花上ノ台・井沼方馬堤・とうのこし』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第35集
- 田中英司他 1979 『風早遺跡』庄和町風早遺跡調査会
- 土屋 積・谷 和隆 2000 『上越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書15 信濃町内のそ1—日向林B遺跡・日向林A遺跡・七ツ栗遺跡・大平B遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告 48
- 東京都教育委員会 1980 『西ノ台遺跡B地点』東京都埋蔵文化財調査報告書第7集
- 仲田大人 2016 「日本旧石器時代の現代人の行動と交替劇」『現代思想 人類起源と進化—プレ・シューマンの想像力』44-10 青土社 pp.150-164
- 仲田大人 2006 「吉岡遺跡群D区BB5層出土の石器群の評価」『岩宿時代はどこまで遡れるか—立川ローム層最下部の石器群—』岩宿フォーラム2006／シンポジウム pp.30-37
- 中村真理・上村昌男 2003 『多摩欄坂遺跡Ⅳ』国分寺市遺跡調査会
- 中村真理 2006 「武蔵野台地中央部の後期旧石器時代初頭の石器群」『岩宿時代はどこまで遡れるか—立川ローム層最下部の石器群—』岩宿フォーラム2006／シンポジウム pp.51-60
- 西井幸雄他 1999 『城見上／末野Ⅲ／花園城跡／箱石』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第211集
- 西井幸雄他 2008 『大木戸遺跡Ⅰ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第355集
- 西井幸雄 2009 『清河寺前原遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第366集
- 西井幸雄 2016 『北坂遺跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第425集
- 前原 豊・宮内 毅 1997 『堀内遺跡群Ⅸ』前橋市教育委員会
- 松本富雄・柳井章宏・大久保 淳 2009 『藤久保東遺跡Ⅱ』三芳町埋蔵文化財報告 34
- 三芳町教区委員会 2009 『藤久保第一土地区画整理事業に伴う藤久保東遺跡発掘調査の概要』三芳町の文化財・考古4
- 村石眞澄・小林 稔他 2000 『横針前久保遺跡・米山遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第176集
- 柳井章宏 1995 「藤久保東遺跡群」『第2回石器文化研究交流会—発表要旨—』石器文化研究会 pp.15-22
- 柳井章宏 1996 『中東遺跡発掘調査報告書』三芳町教育委員会
- 横山祐平・川口 潤他 1984 『武蔵台遺跡Ⅰ』都立府中病院内遺跡調査会